

## 『少年と二人の神』

作 タカビー(奥井 隆)



狭き門より入れ、  
滅びにいたる門は大きく、  
その路は広く、之より入る者多し。

「マタイ伝七章十三節」より

『ギャンブル依存症克服への道』

<http://osakafp.livedoor.biz/>

Copyright©2008～2009 Takashi Okui All rights reserved

## 始めに

この作品は、全て、私タカビーの創作でありフィクションです。  
登場人物は実在しません。 写真は全てイメージです。  
地名その他につきましても、事実と異なる場合がありますのでご注意ください。

また、この作品につきましても著作権は、タカビーにあります。

従いまして、その内容等をコピーして転売する、配布する等、  
著作権を侵害する行為は、おやめくださいね。

実際過去にもありましたが、特にWEB上で公開したり無断配布されたりしますと、  
トラブル発生の原因となります。

私はあなた様を信頼いたしますが、万一そういった行為があった場合  
やむなく法的手段をもって対抗させていただくことになります。

どうぞよろしくお願い申し上げます。

『 ギャンブル依存症克服への道 』

<http://osakafp.livedoor.biz/>

Copyright©2008 ~ 2009 Takashi Okui All rights reserved

## 『少年と二人の神』

作 タカビー

昔あるところに、一人の少年が住んでいました。少年は家が貧しかったので、  
鍛冶屋かじやの親方やかたの館に住み込んで働いていたのです。

少年は親方のもとで働きながらも自分の家へ仕送りし、僅わずかずつではありましたが  
貯金もしていました。

少年はとても真面目で、親思いの優しい子でした。

～少年には夢がありました…。～

それは自由に空を飛ぶことだったのです。



毎日、親方やかたの下で働きながらも、いつも少年は空を飛ぶこと  
ばかり夢見ていました。そしていつしか…、

少年は空を飛ぶことばかりか、翼つばさが欲しいと願うようになったのです…。

～少年は祈り続けました。～

毎日、神に願い、そして祈り続けたのです。

“かみさま…、どうか私に翼<sup>つばさ</sup>を与えてくれませんか…！？”

“もし翼があれば、私はどんなに幸せに生きることが出来るでしょう！”

“そしてこの世の果てまでも飛んで、本当の自由を手に入れることが出来るのです！”

～彼は毎夜のように、そうやって神に祈りを捧げました。～

しかしながら、少年の夢は決して叶えられはしなかったのです…。

とある日のことです。天国の神々の中で、その少年の姿にふと目を留めた神が居ました…。

その神は天国の神々の中でも、一番慈悲深い心の優しい神だったのです。

その神は、何とか少年の願いを叶えてやれはしないかと、それから毎日のように考えるようになりました。

しかしながら…、

天国の掟<sup>おきて</sup>で、人間に翼を与えることは許されていなかったのです…。

そんな時、少年の姿を見つけたもう一人の神が居ました。  
その神は天国の神々の中でも、一番ずるい残忍な神でした。

この神は、真面目に働く少年を墮落<sup>たらく</sup>させてやろうと考えました…。

そう思ったその神は、或る月夜の晩に少年の前に現れ、  
少年にこう囁<sup>ささや</sup>いたのです…。



「お前が、本当に翼を欲しいというのなら、良い方法を教えてやろう…。」

「いいか、俺の言うとおりにやるんだ！ まずは今の仕事をすぐさまやめてしまえ！」

「そして、有るだけの金を持って隣町へ行き、そこにある賭<sup>と</sup>場<sup>ば</sup>で俺の言うとおりに金を賭けるのだ…。」

「ルーレットの前に座れ！ そして最初の勝負で有り金全てを6の目に賭けろ。」

「お前は必ず勝てるだろう、勝てればお前の家族へもすぐに仕送りが出来るだろう。仕事もしなくてすむ…。」

「ただしその勝負1回だけで必ず帰ってくるんだ。いいか！それ以上やってはならない。」

「そうしないと、お前はとんでもないことになると思え…。」

「すぐさま、そこまでやるんだ！ お前がやったことを見届けてから、俺はまたここに来るとしよう…。」

～ そう言うと、その神は少年の前から姿を消したのです。～

少年は思い悩みました。しかし本当に翼を得られるのなら、やってみようと思いました。

すると突然その時、少年の前に別の神が現れました。その神は、慈悲深い優しい神だったのです。

～ 神は少年にそっと優しく言いました。～

「少年よ、私はずっとお前の願いを叶えてやろうと思っていた…。でも、天国で人間に翼を与えるのは禁じられているのだよ。」

「今はこれまでのように、頑張って真面目に働きなさい！ そうすれば、お前の欲しい自由も叶えられるし、皆を幸せに出来る…。」

「そして、好きなところに旅する事だって出来るのさ…。」

神はそう言って、少年の前から姿を消しました。そしてすぐにまた少年の前に舞い戻ってくると、少年にこう言いました。

「それと…、お前がさっき出会ったのは、天国で一番ずるく、残酷な神だ。決して、あいつの言うことを聞いてはならないよ…。」

「人間は真面目に働かなければ、幸せを得ることは出来ないのさ…。」

そして神は少年の前から姿を消し、もう戻っては来ませんでした。

～それからの数日、少年は思い悩みました。～

幸せになる為に真面目に働くか、翼を得る為に仕事をやめ隣町の賭場に勝負しに行くか…。

本当に思い悩んだのです。でも少年が選んだのは…、

～愚かにも楽な方だったのでした…。～

その次の日少年は親方の元へ行き、仕事を今日限りでやめさせてもらえるように頼みました。

親方は驚きました。そして真面目に働く少年をたいそう気に入っていたので、必死で思い留めようと思ってこう言いました。



「いったいお前は どうしたって いうんだ！  
何かあったのかい？ 私が力になれることであれば、  
何でも言ってごらん…。」

でも少年はただ一言、今まで世話になった礼を言っただけで、その言葉に耳を貸さずに親方の元を飛び出したのでした…。

少年は残酷な神に教えられたとおり、隣町の賭場まで行きました。ポケットには、今まで勤めてコツコツ貯めた僅かばかりの貯金、そして最後に親方が手渡してくれた1クローネの銀貨が1枚…。

～少年はこの1クローネの銀貨だけは、使わずに取っておこうと思いました。～

なぜならその銀貨は、最後に親方と別れるとき…、

「これを持ってお行き…。そして、最後に本当に困って  
どうしようもない時に使うんだよ。」

そう言って手渡されたお金だったからです。そのお金をもう片方のポケットに仕舞いこんで、少年は賭場へと向かいました。

少年は賭場に着くと少し躊躇<sup>ためら</sup>いました。今までから、賭場はろくでもない人間が  
出入りする所だと聞かされていたからです。  
しかし思い切ってそのドアを開けました……。

賭場の中は、大人たちが皆顔を真っ赤にして、怒鳴ったり喚<sup>わめ</sup>いたりして、  
何ともいえない不愉快な場所でした。

少年は、言いつけどおりに一台の古ぼけたルーレットの前に座ると、  
ポケットからお金を取り出しました。

「ほう！ 坊や、そこで何をしようっていうんだい？」

横から冷やかし半分で声をかける男の方を振り向きもせず、少年はポケットに  
手を伸ばしました。そして、全てのお金を掴<sup>つか</sup>むとこう叫びました。

「これを……、全部6番に！」

真ん中にいた男は、驚いて少年をみつめました。しかしすぐに少年の手から  
そのお金を受け取ると、6の上に全ての札を置きました。

“どうぞ6番にあの玉が入りますように……。”

“そして、僕の願いが叶いますように……。”

～少年は祈り続けていました。～



しばらくしてルーレットの回転が緩やかになり、  
やがてその小さな玉はゆっくりと数字の書いてある  
フレットの上を転がり始めました。

そして、吸い込まれるように6に滑り込んだのです……。

周囲の大人たちの驚く声と歓声を無視して、少年は分厚い札束を掴むと

逃げるようにして賭場を後にしました……。

- > 親愛なるお父様 お母様
- >
- >
- > 僕は元気になっています
- >
- > 今はもう鍛冶屋の親方の所では
- > 働いていません
- >
- > でも、もっとたくさんのお金を
- > 稼げるようになったのです
- >
- >
- > 今日はこれだけのお金を
- > 送ります
- >
- > これでお婆さまに、もっと
- > 良い薬を飲ませてあげてください
- >
- > もっとたくさん送れるように
- > 僕はしっかりがんばります
- >

少年はそう手紙を書くと、自分が暮らしていけるだけのお金以外の全てを  
父母の元へと送りました。

～少年は幸せでした。～

たくさんのお金が手に入ったからです。

自分に翼が与えられると思ったからです

そして、皆を幸せに出来ると信じていたからです。

～そしてこう思っていたのです。～

“幸せを手に入れることは容易いことであると…”



少年は、その日の宿を探そう思いました。

少しばかりの荷物を詰めた小さな鞆こうりと行李(注1)を手に持ち、夜の街を歩き続けたのです…。

でも、全く宿が見当たらなかったなので町外れの庵いおり(注2)まで来て、そこで宿を借りようと思いました。

少年が古ぼけた扉を叩くと、中からしゃがれた男の声が聞こえました…。

「どなたさんじゃね？ こんな夜更けに…。」

少年は外から、その声の主に向かって話しかけました。

「すみません…。今夜一晩、宿をお借りできませんか？」

「街には宿が無くて、困っているんです…。」

「いいじゃろう…。開けなさい。」

中に入ると、部屋はきれいに片づけられ、暖炉だんろでは火が赤々と燃えていました。

テーブルの上には、いろんな料理が並べられていて、ちゃんと食器まで用意されています。

「さあ、良かったらお食べ！ 外は寒かったろう…。」

中に居たのは一人の老人でした。少年は振り返ったその老人の顔を見ると、あっと驚きました…。

～その老人は、あの日最初に少年が出会った方の神でした。神は言いました。～

「どうだ！ちゃんと稼げただろう…？」

少年は、目を輝かせて言いました。

「あなたのご恩は、一生忘れません。すぐに家にお金を送りました…。これで祖母にちゃんとした薬を買ってあげれます！」

神は笑いながら少年に言いました。

「お前はしばらくここに住むがいい。そうして毎日俺が言ったように隣の賭場に行き、勝負してくるのさ。」

「そうすれば、必ずお前は勝てる…。明日お前が賭けるのは16だ！」

「ただし、16に賭けるのは3回目の勝負だ。それまでは、どこでもかまわない。適当な数字に1クローネずつ、2回賭けるがいい…。」

「そして、3回目に有り金全て勝負したら、すぐにやめて帰って来い。いいな…！」

そう言うと、神は少年の前から姿を消しました。少年はテーブルに残された料理を口に運びました。

そのいくつかの料理は、これまで少年が一度も食べたことが無かったほどおいしい料理でした。

少年は満足でした。

少年は幸せでした。

少年は明日が待ち遠しいと思いました。

3回目の勝負で、玉が16に転がり込むことを思い浮かべ、とても嬉しく思いました。

次の日の夕方、少年は同じように隣町の賭場まで行き、また神に教えられたとおり勝負しました。

最初の2回は勝てませんでしたが、3回目に教えられたとおりすると、玉は吸い寄せられたように16に転がり込みました。

また少年は勝ち、<sup>いきようよう</sup>意気揚々と庵へと帰ってきました。中で待っていた神は少年に言いました。

「明日、お前が賭ける番号は8だ。ただし8に賭けるのは、5回目の勝負だ、それまでは好きな数字に4回1クローネずつ賭けるがいい……。」

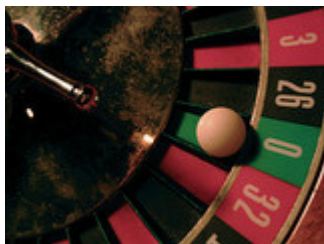
そして神は昨夜と同じくご馳走の並べられたテーブルを残し、立ち去っていきました。

少年は残されたテーブルの料理を頬張り、満足でした。そして明日の勝負のことを考えると、心がうきうきとしてきました。

翌日も少年は賭場に行き、神に言われたように勝負を始めました。昨日は1回目と2回目の勝負に負けました。ところが今日は、負けと思っていた3回目の勝負で1クローネを賭けた0に玉が転がり込みました。

～少年は、驚きました。～

自分が勝てるとは思わなかった勝負に勝ったからです。でも考えてみれば、偶然勝てることもあって当然なのです。



少年は、次の4回目の勝負で同じく0番に1クローネ賭けました。するとまた、0に玉は収まったのです…。

～少年は思いました。～

“しまった！ もっとたくさん賭けていれば、もっと儲かっていたのに…”

～そして、こうも思いました。～

“こういった勝負は、案外簡単に勝てるものだ…”

～少年は次の勝負で、神に言われたように全てのお金を8に賭けました。～

すると…、

～玉は8番に転がりかけたものの、今度は何と隣の12に落ちたのです。～

少年は悔しさのあまり手を震わせ、それから肩を落として庵へと向かいました。

全ての金を失い、残された金は親方から手渡された1クローネだけが残りました。

～庵に着くと、少年はドアを開けました。～

すると、今日は暖炉の火も消えテーブルには、料理は何も置かれてはいませんでした。ただ…、

テーブルの上に一言書かれた紙切れが残されていました。その紙切れには、こう書かれてあったのです。

“明日、勝負に行ってはならぬ。”

～少年はその紙を見て絶望しました。～

“何ということだ！ 僕は勝負に負けたばかりか、明日勝負に行ってはいけないとまで言われてしまった…”

“そればかりか、今夜はこんな火の消えて凍えた部屋で、食事も摂らずに過ごさねばならない。”

～少年はテーブルに肘をつき、頭を抱えました。～

“どうすれば良いのだろう…”

そして、何気なく右のポケットに手を伸ばすと、そこにあったのは親方から渡された1クローネの銀貨だったのです。

“1クローネの銀貨が1枚…”

少年はその銀貨を手にとってみました。そしてその時ふと思い出したのが、今日偶然にも1クローネづつ賭けて勝った2回の勝負だったのです。

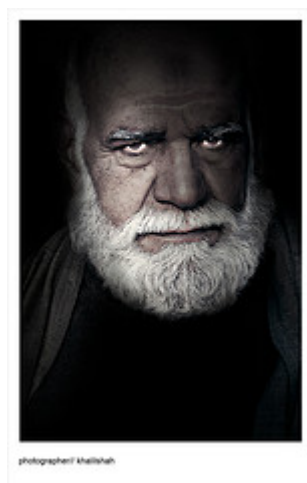
“この1クローネで、明日勝負すれば勝てるかもしれない！”

その時少年はそう思ったのです。しかしながら…、

テーブルに置かれた紙には、“明日、勝負に行ってはならぬ”と書かれてあるのです。

少年は思い悩み、神からの言葉の書かれた紙を手に取りました。  
するとその紙は一瞬宙に舞うと、ハラリと床に落ちました。

少年は慌<sup>あわ</sup>てて、その紙を拾いあげようとして、そして跪<sup>ひざまず</sup>いて紙を拾いあげ  
見上げると、そこに立っていたのは心優しい方の神でした。



～神は少年に向かって、厳しい口調で言いました。～

「少年よ、お前は罠<sup>わな</sup>にかかったのだ！ お前が2回も勝負に  
勝てたのは、魔性<sup>まじょう</sup>の力のせいなのだ…。」

「明日からまたあの主の下で真面目に働くがいい。そして、  
これからは決してあの神の言うことを聞いてはならぬ！」

少年は驚きました。そして神に尋<sup>たず</sup>ねたのです…。

「それでは、あなたがあの神を…。」

「そのとおり…。いかにもわしがあの悪い神を追い出したのだ。これからは  
決してあのような場所へ行ってはならぬ。賭博<sup>とばく</sup>は人間を墮落させるには、  
一番簡単な方法なのだ…。」

「私はもう行くでしょう…。だが安心するがよい！ お前が心を入れ替えるなら、  
もう二度とあの神はお前の元へ来ることは無い…。」

～ そういい残すと、神は姿を消しました。～

部屋に残された少年は、迷っていました。明日親方の元へ戻って真面目に働くか、それとも先ほどの神の言いつけに背いて勝負に行くか、悩んでいたのです。

～ そして少年はふと思いました…。～

“今の神はあの神を悪者だと言ったが、あの神はずっと僕の願いを叶えてくれたではないか！”

確かに少年はあの神の言葉を信用して従ったおかげで、病の床に居る自分の祖母へ、よく効く薬を届けることが出来たのです…。

前の晩も暖かい部屋で、あんな素晴らしいご馳走にありつけたのです。

～ 少年は、もう迷いませんでした。～

親方から手渡された最後の1クローネを手に取り、残された最後のコインをどのように賭けるか考えていたのです。

～ すると突然、少年の手からコインが滑り落ちました！～、



コインを拾い上げた少年の前に立っていたのは、残酷なあの神だったのです…。

神は少年に向かって笑いながら言いました。

「どうした！ そうだ…！ 腹が減ったろう。それにこの部屋は寒い…。」

そう言って、神は左手で暖炉を指差しました。そして右手でテーブルを撫なでました…。

するとどうでしょう！ 暖炉の火は煌々こうこうと燃え始め、テーブルの上は見事な料理が、見る見るうちにいくつも並びました…。

～少年は残酷な神の足元ひざまずきに跪き、言いました。～

「お願いします！ 私にもう一度勝負させてください！」

～残酷な神は顔色を変えることも無く、言い放ちました。～

「お前は、いいつけそむに背いたな…。」

「お前は今日、勝負に勝てなかった筈だ<sup>はず</sup>…。」

～少年は、驚きました。そして、神にすぎるように言ったのです…。～

「はい、その通りです。しかし…、私は決して言いつけに背いてはいません！」

～残酷な神は、少年の目を睨<sup>にら</sup>み付けました。そしてこう言いました。～

「お前の右のポケットに有るのは何だ！？」

少年は、はっとしました。なぜなら少年の右のポケットには、親方から手渡された最後の1クローネの銀貨があったからです…。

「俺はお前に言った筈だ！ 有り金全てを8に賭けて来いと…。  
お前はあの言いつけに背いたのだ…。」

「だからお前は勝てなかったのだ！ 愚<sup>おろ</sup>か者め…。」

～少年は愕然<sup>がくぜん</sup>としました。～

そうでした、少年は親方の言葉に従って、最後の1クローネ銀貨を右ポケットに仕舞い込んでいたのです…。神は続けました。

「そんなものを大切そうに仕舞い込んでいるから、勝負に負けるのだ。

勝負するならとことんだ！ それが勝負の掟<sup>おきて</sup>というものなのだ。」

「お前は俺の言いつけに背いて、最後の1クローネを残した…。  
確かにそれを残せば、今日明日くらいは一切れのパンをかうことも出来よう…。」



「だが、そんなことをして何になる！  
一日や二日のパン一切れの為に、  
はした金を取っておいて何になる…？」

「では、どうせよと…？」

～少年は、<sup>こんがん</sup>懇願するように神に尋ねました。神は言いました。～

「最後の1クローネであろうと、とことん勝負するのだ！ そうすれば、  
一日や二日どころか一年や二年遊んで暮すことが出来よう！」

「真面目に働いて何になる？ 一回勝てば、それだけの金が得れる…。  
それが賭けるということなのだ！ ところで…、」

～残酷な神は唇を<sup>ゆが</sup>歪ませ、にやりと笑いました。～



「お前は、そんなに翼が欲しいか…？」

少年は答えました。

「はい！ でも…、今は翼よりも明日の勝負の行方の方が気になります。」

～神は大笑いして言いました。～

「お前は、たいしたやつだ！」

「そうだ、その通りだ！ 自由になって何になる、空を飛んで何になる…？」

「勝負に勝って金を得れば、何だって好きなことができよう！  
どんな望みも叶うものだ…。」

～少年は神に尋ねました。～

「では、明日から私はどうすれば良いのでしょうか？」

～神は冷酷な眼差しで少年をじっと睨み、しばらくして微笑みかけました…。～

「お前は俺の言いつけに背いた。ただ、もう一度だけチャンスをくれてやろう…。」

～少年は心をときめかしました。神は目を細め少年の姿を見つめました。～

「どうだ？ まだそんなに翼が欲しいか…？」

「いいえ！ 神様…、翼よりも勝負に勝たせてください。そうすれば、  
家にもお金を送れます。そして…、」

「そして…、それからどうした…？」

～神は嬉しそうにそう言って笑いました…。～

「私自身、とても嬉しいのです。勝負に勝てば楽しく、何もかもがうまくいきます。幸せなのです……。」

「よし！ それならば教えてやろう……。」

～神はまた口を歪め、笑いながら少年に話し始めました。～

「明日の最初の当たり番号は7だ。最初は7に1クローネ賭けるがよい……。」

「その次の当たり番号は14だ。ただし……。」

「ただし、どうなのですか……？」

～少年はその次の言葉が知りたくてどうしようもありませんでした。  
少年は燃えるような眼差しで神を見つめました。～

「2回目に14と来るか、3回目に14なのかは明かさぬことにする。  
お前の力で考えて賭けてみよ！」

「2回目か3回目かは、お前が考えてその1回に全ての金を賭けるがよい。  
そして……。」

「3回の勝負を終えたなら、必ず戻ってくるのだ。そうしないとお前は  
とんでも無いことになる……。」

「それともう一つ……。」

「勝負が終わるまでは、誰とも口をきいてはならぬ。このこともよく覚えておけ……。」

～少年は、少し不安になりました。だから神に尋ねたのです。～

「とんでもないこととは、一体なんなのでしょう…？」

～ 神は顔色を全く変えることなく、言いました。～



「お前が賭場で見えて来た者どもと、  
同じようになるとのことだ。」

「あれらは、鳥とはまた違った翼を持っているのだ…。」

～ 残酷な神は最後に意味ありげにそう言うと、少年の前から姿をくらませました。～

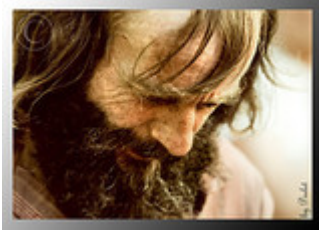
次の日、夕刻を待って少年は賭場へ行きました。そして昨日と同じルーレットの  
前に座ったのです。

～ すると、隣にいた男が声をかけました。～

「嘆かわしいことだ…。」

～ 少年と目が合うと、その男は寂しそうな声でこう言いました。～

「俺はこいつのせいで、女房と別れた、家族を失った、信用も無くした、  
全ての金を失った…。」



「今日、この1クロネの勝負に負けたならば、  
あとは首をくくって死ぬだけだ。」

「何とか、勝たせてくれ……！」

そう言って、その男は手を合せているのです。少年は思わず、次の当たりが7であることを教えてやろうと思いました。しかも1回か2回目後には、14へと玉は転がり込むのです……。

この男は次の勝負で負ければ、首をくくとまで言っているのです。しかし、少年はそのことを話そうとはしませんでした。なぜなら……、

あの神に約束していたからです。勝負が終わるまで、誰と口を聞いてもならないのです。

ルーレットが回り始め、少年は7へ、その男は何と14へ1クロネを賭けました。

～男はひとり言のようにつぶやきました……。～

「そうさ、14だ！俺は14に賭けて一度に20万クロネ勝ったことがあるんだ……！」

そしてルーレットが止まったとき、玉は少年が賭けた7に入っていました。

男は突然立ち上がり、きせい奇声をあげて表へと走り去りました。

～そして、二度と戻ってはこなかったのです。～



少年はもはや疑いませんでした。次に必ず玉が14に転がり込むと信じたのです。

～少年の狙いは的中しました！～

瞬く間に少年は、1200クローネもの大金を得たのです。しかしここで少年は迷いました…。

“神は、3回の勝負をして帰って来いと言った…”

少年は戸惑いませんでした。自らの金の半分を、昨日に勝負して2回勝った0に賭けたのです。

すると玉は、何とさっきと同じように14に入りました。少年は驚きました。そして、途方も無く悔しかったのです…。

“もう一度あの14に賭けていたら、どれほど儲かっていたのだろう…！”

～そして思いました。～

“あの男も、この勝負で14に賭けることが出来れば、たんまりと勝っていたのに…”

でも、神からは3回の勝負で帰って来いと言われているのです。

少年は諦<sup>あきら</sup>めて帰ろうと思いましたが…。

～しかし、悔しかったのです。～

今、無駄に賭けた半分のお金を失ったことを考えると、とてつもなく悔しくなりました…。そして次は今自分が賭けた0に玉が滑り落ちるような気がしました…。

でも、勝てる保証は無いのです。ましてや、神の言いつけに背くことにもなるのです…。

～少年は<sup>おきて</sup>掟を破りました。～

“一度だけ、そう！1クローネだけ、次に勝負してみよう！”

そう思ったのです。そして1クローネ銀貨を一枚つまむと、0の上に置きました。

そして驚いたことに次にルーレットが止まった時、何と玉はまたしても14に入っていました。

少年は悔しさのあまり手を震わせました。そして次は3枚の銀貨を手にとると、14の上に置きました…。

すると、次に玉が転がり込んだのは1回前に少年が賭けた0だったのです。それから少年は我を忘れて賭け続けました…。

しかしながら…、



～少年は二度と勝てることは無かったです…。～

少年は庵に戻ってきました。

少年は全ての金を失いました。

～しかしながら…、少年が失ったのは、お金ではなかったのです。～

部屋の中には誰も居ませんでした。ひっそりと静まり返った部屋の中で、少年はテーブルに座り一人考えていました。

“明日からは、真面目に働こう！”

そう少年は決心し、自分の荷物をまとめ始めました。そして次の朝少年は親方の元へ行き、再び働かせてもらえるよう頭を下げて頼みました。

親方はたいそう喜び、少年を温かく迎えてくれました。少年は真面目に働きました。

以前にも増して頑張って働いたのです。

～そして、次のお給金をもらう或る日のこと…、～

「さあ！ このお金は、お前が一生懸命汗水をたらして働いて得たお金だ。  
大切に使うんだよ…。」

そう言って、親方は60クローネを少年に手渡しました。 その時、  
ふと少年は思ったのです…。

“2クローネを賭けて、1回勝負して勝てば手に入る金額だ…”



～そうでした、あの時少年が失ったのは1クローネの銀貨だけ  
ではなかったのです…。～

一度食べた甘い果実の味を忘れることが出来ないのは、  
よくある話です。

夕暮れになり仕事が終わると、少年はおかみさんが作ってくれたミートパイとスープを  
平らげ、こっそりと親方の屋敷を抜け出しました。

一度だけ勝負しようと少年は考えたのです。そして少年はこうも考えていました…。

“1 クローネだけ勝負しよう！ その1回の勝負に負ければ絶対に帰ってくるんだ！”

～それ以上はやらないと誓って、賭場へと向かったのです。～

賭場の中は煙草の臭いが充満し、酔っ払いの男や大声で喋る人で溢れていました。

そればかりか、この日は大声で罵り合う声まで聞こえました…。

「さあ！ とっとと帰った！ 金の無いやつに用は無いだよ。」

ルーレットの横に立つ男が、声を荒げて怒鳴りました。怒鳴られた男は、床に手を付きその男に向かって必死で頼みました…。

「頼む…。あと1回勝負させてくれ！ あと1回だけでいいから、そうすりゃ必ず14に来るんだ。お願いだ、頼む！ このとおりだ…。」

しかしながら男は、他の男たちの手で掴まえられ、外に放り出されました。

“14…”

少年はその数字を聞くと、すぐさまそのテーブルに駆け寄り、ルーレットの前に座りました。そして次の勝負で1クローネ銀貨を手にとると、14の上に置きました。



勝負が始まりました。しばらくしてルーレットの回転が緩やかになり、

玉はフレットの上を飛び跳<sup>は</sup>ねていきました。

そして視界から玉が消え、玉を数字の上に乗せたままホイールはゆっくりと回り続けました。そして…、

～少年の前に玉が来たとき、玉は14の上に乗っていました。～

少年は自分の予感が的中したのが嬉しくて、たまりませんでした。そして、さっき外へ連れ出された男のことなど、とうに忘れ去っていたのでした…。

少年はたった1回の勝負で、36クローネを手に入れました。でも、次の勝負も勝てるのではないかと思いました。

“2クローネを賭けて勝てば、一月の給金以上に稼げる…”

少年はそう思って、もう左手には次の銀貨を2枚握り締めていたのです…。

～もう誰にも少年を止めることなど出来ませんでした。～

それから少年は賭け続け、その後は一度たりとも勝てませんでした。少年は瞬く間に全ての金を無くしたのです…。

「さあ、まだやるのかね！？ やらないなら、他のお客さんが待っているんだ。そこをどきな…！」

男の声に急かされるようにして、少年は賭場を後にしました。

今朝親方から貰った60クローネは、全て使い果たしました。

少年は呆然<sup>ぼうぜん</sup>として歩き続けました……。

“ああ！ なんということだろう！”

“僕はこんな賭博に手を出して、家に仕送りしなければならぬ金までも  
全て使い果たしてしまった……。”

“これから、どうすればいいんだ！”

～この時、少年に残された方法はたった二つしかありませんでした。～

一つは、親方に手をついて謝り、自分のしたことを全て話して許しを請<sup>こ</sup>うことでした。

～しかし……、それは許されないことだと思ったのです。～

少年は勝手に館を飛び出した自分を再び温かく迎えてくれた親方に、  
これ以上迷惑をかけることは出来ませんでした。

もう一つは自らの命を絶って、故郷の父と母、そして祖母に償うことだったのです……。

“お婆さん……。僕はこんな馬鹿なことに手を出してしまったせいで、あなたへ  
お薬代を送ることさえ出来ませんでした……。”

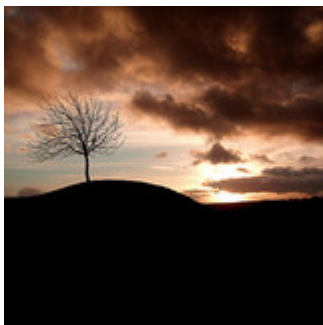
そう思い、少年は涙ぐみました。そして、死んで詫<sup>わ</sup>びようと心に決めたのです。

“なぜあの時、最初の神の言うことを聞いておかなかったのだろうか……？”

少年は、自らの心に問うてみました。しかしながら、翼が欲しかったという理由以外には、何も思い浮かばなかったのです。少年は、ふと思いました……。

“翼を欲しいと思った僕の心が、間違っていたのだろうか……？”

でも、答えは出ませんでした。少年はいっそう生きているのが辛くなりました。天に召され翼を与えてもらえるのなら、それでも構わないと思ったのです……。



意を決して、少年は歩き続けました。  
あの庵を目指したのです……。

暗闇の中を歩き続け、庵にたどり着いた少年は、その扉を  
開けると埃<sup>ほこり</sup>にまみれたランプに灯をともしました……。

そして新<sup>たきぎ</sup>を縛ってあるロープを1本引き抜くと、天井の真下に有る丸太に  
しっかりと結びつけました。そして……、

椅子に上って垂れ下がったロープに輪を作り、自分の首にその輪をかけました……。

“おとうさん、おかあさん……、僕は本当に悪い子でした。”

“貧しい家を助ける為にこうして働きに出たのに、賭博を覚えて全てのお金を失いました……。”

“お許してください……。”

～少年はそう思い、手を合せました。 そのときです！～

「お前は地獄に落ちるがいい！」

～その声と共に、少年の背中が押されました。 少年は宙吊りになり、もがき苦しみました。～

「おいヨゼフ！ 何だっけこうも、うなされているんだ！？」

「早く起きろ！ 今日はお前が鞆ふいに (注3)の当番じゃないか！」

～ 親方はそう言うと、少年を起こそうとしてその体を揺り動かしました。～

「さあ！ とっとと朝飯を食べて、急いでやっとなまなまとくれ。鉄が鈍なまってしまう…」

少年は目を開けました。少年の目の前に居たのは、あの優しい親方だったのです…。



「よし、目が覚めたか！ どうした！  
何か悪い夢でも見ていたのかい…？」

親方はそう言って、少年の頭を撫でました。  
その手はいつも少年を撫でてくれる、温かく大きな手だったのです…。

「親方…。」

～ 少年は涙を流しながら、親方に抱きつきました。 親方は言いました。～

「悪い夢を見たんだね…！ 誰だっけ、そりゃ悪い夢を見ることだってあるものさ！」

「でも、世間に出てから悪い夢を見ちゃいけないよ！ 真面目に働けば、怖いものなんて何も有りゃしないのさ…。」

そう言って、親方は微笑みました。少年は今までのことが全て夢の中の  
ことだったと知り、胸を撫で下ろしました。

～こうして今日も、仕事場に蹄鉄<sup>ていてつ</sup>を打つ威勢<sup>いせい</sup>の良い音が鳴り響きました。～

いつまでも眺<sup>なが</sup>めているわけにはいかず、私もそこを立ち去ることにしました…。

少年がこの国一番の鍛冶屋<sup>かじや</sup>職人になったと聞いたのは、私が7年後に再び  
その国を訪れ、しばらくたってからのことです。

私は少年に翼を与えてやることは出来ませんでした。  
でも、もっと大切なことを教えてやる事が出来たのです…。

～ 完 ～

(注1) 行李 (こうり) : 衣服などを入れて持ち歩く、植物のつるなどで編んだケース

(注2) 庵 (いおり) : 社会にかかわらなくなった隠居などが住む、粗末な住まい

(注3) 鞴 (ふいご) : 鍛冶屋などが使う、火力を強くする為の送風機

『 ギャンブル依存症克服への道 』

<http://osakafp.livedoor.biz/>

Copyright©2008～2009 Takashi Okui All rights reserved

## あとがき

最後までお読みいただき、どうもありがとうございました。  
いかがだったでしょうか・・・？

このストーリーは、ギャンブル依存症になることを防止することと、  
今現在ギャンブル依存症でお困りの方を励ます為に、書かせていただきました。

実は、このストーリーは私と読者さんとの合作として、私が1話から6話まで書き、  
最終話を読者さんに書いていただく、もしくはそのアイデアを頂戴するという  
スタイルで書かせていただいたものでした。

読者様の作品と過去の作品については、こちらをご覧くださいませ！  
<http://osakafp.livedoor.biz/archives/65125291.html>

今回は一番評判が良かった、『桜パパさん』のアイデアに沿って、  
私が最終話を書かせていただいたものを、お読みいただきました。

このストーリーをブログに連載中は、皆様からの温かいコメントと、多くの皆様から  
励ましのメールを頂戴いたしました。ほんとうにありがとうございました。

今回、お便り頂戴した皆様への感謝の気持ちを込めて、電子書籍として  
編集させていただきました。

『ギャンブル依存症克服への道』

<http://osakafp.livedoor.biz/>

Copyright©2008～2009 Takashi Okui All rights reserved

～このストーリーの執筆に、ご協力いただいた皆様です。～

みなさん、どうもありがとうございました。

- 三沢先生 [Studio恭 三沢先生のひとりごと……](#)
- MJさん [ギャンブル依存症を克服する10のステップ](#)
- 禁パチ地蔵さん [禁パチから自己改造へ](#)
- kokoemoonさん [うつうつなソーシャルワーカー](#)
- 桜パパさん [桜パパの Slowlife](#)
- うーしょさん [ギャンブル依存はもう嫌だ！～パチンコ、スロット、FX～](#)

最後に…、

このストーリーがあなたと、あなたのかげがえのない方のお役に立てることをお祈り申し上げます…。

よろしければ、あなたの感想をお寄せください。  
飛び上がって喜びますよ！ メールは[コチラ](#)から…。

最後までお付き合いいただき、どうもありがとうございました。

タカビー(奥井 隆)

『ギャンブル依存症克服への道』

<http://osakafp.livedoor.biz/>

Copyright©2008～2009 Takashi Okui All rights reserved